05 設計基礎 A

開講年次：学部１年生第３クォーター

［担当教員］
光嶋裕介（特命准教授）後藤沙羅（助手）
［Teaching Assistant］
田島広大（A69）前田稜太（A69）宮本美咲輝（A69）

■課題概要

建築をデザインする上で必要となる基礎的な造形力を獲得することを目的とし、立体造形制作（紙を素材とした立体構成作品や、スケール感覚を養う立体作品の模型・シート制作）を通じて、構成力や造形力を習得するとともに、形態や色彩感覚、素材の質感、スケール感覚、平面と立体との関係などの空間造形感覚とそれらを表現する能力を養う。また、課題を通してスタディからプレゼンテーションまでのスキルを身につける。

紙を素材とした立体構成作品制作については p.27 参照。スケール感を養う立体作品制作については、彫刻・マテリアルを展示するための光を利用したギャラリーの制作を行う。

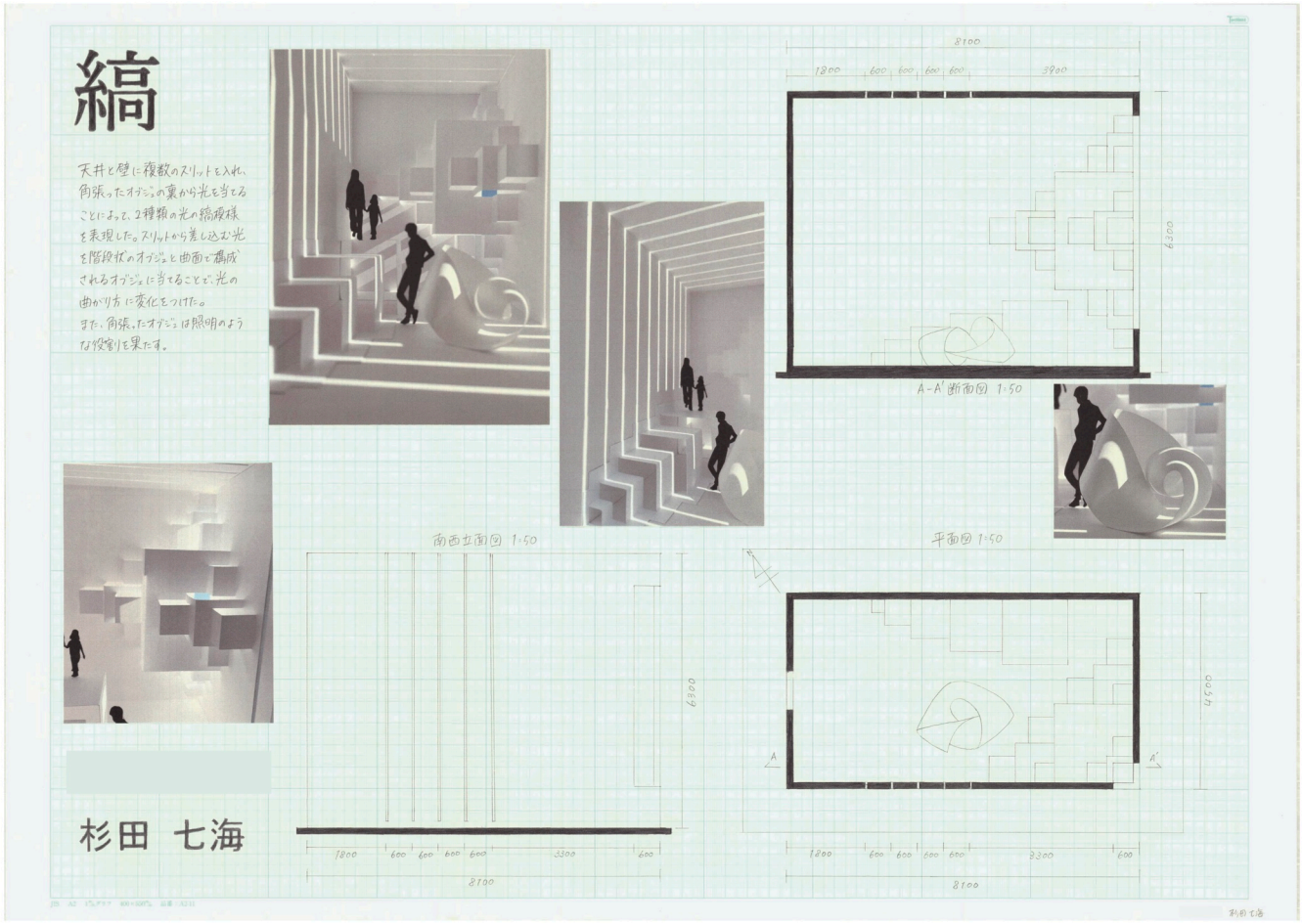
■課題スケジュール

内容	グループ①	グループ②
ガイダンス	遠隔講義	
即日課題（ゲスト講師：大谷弘明先生）	対面演習＠六甲ホール	
模型制作	対面指導	遠隔指導
模型制作	遠隔指導	対面指導
模型仕上げ・シート作成	対面指導	遠隔指導
模型仕上げ・シート作成	遠隔指導	対面指導
講評会（全員発表）	対面講評会	

講評会の様子

講評会の様子

杉田七海「縞」



設計基礎 A
特別演習『美しく高い塔、自分が考え出した塔。』

［担当教職員］
大谷弘明（客員教授 / 日建設計常務執行役員、設計部門プリンシパル）
光嶋裕介（特命准教授）後藤沙羅（助手）
［Teaching Assistant］
田島広大（A69）前田稜太（A69）宮本美咲輝（A69）

■特別演習課題 『美しく高い塔、自分が考え出した塔。』

みなさんが神戸大学工学部建築学科に入学されたことを喜ばしく思います。これからいよいよ建築の専門教育をみなさんは学ぶことができます。建築とはオブジェではありません。見るものではなく使うもの、体験するものです。人間を取り巻くすべてが建築といっても過言でありません。みなさんは今後、驚くべき未知の空間体験をたくさんしていくはずです。

今日は、みなさんと建築をつくるとはどういうことなのか、一緒に考えたいと思います。考えるといっても頭で考えるのではありません。手を動かしながら考えましょう。建築とはこれらの思考と試行の果実なのです。

頭の中にある塔のイメージをもとに実際の立体造形にしてみましょう。

夢に出てくるような美しい塔、体験してみたい展望の空間。これを独力でつくってください。

考えながら形にし、実際に組み上げて、出来上がりをまわりと比べ、感じて、批評しあう、これらのプロセスが建築の設計には大切です。

これらの活動すべてが建築的な「体験」の事始めになります。「原体験」となります。

・日　時　　10 月 8 日（金）3、4 限（13:20 ～ 16:40）
・場　所　　百年記念館　六甲ホール・ホワイエ
・時間配分　各自の作業場確保　13：00 ～ 13：20 @ ホワイエ
　　事前説明　13：20 ～ 13：25 @ ホール
　　制作　13：25 ～ 15：55 @ ホワイエ
　　作品の移動　15：55 ～ 16：00 to ホール
　　講評　16：00 ～ 16：30 @ ホール
　　清掃　16：30 ～ 16：40
・材　料　　A3 ケント紙 5 枚
・持ち物　　定規、はさみ（カッターは不可）、テープ、ホッチキス、作品を持ち帰るための袋、床に敷くビニールシートや段ボール、マットの類、床での作業用の動きやすく汚れても平気な服装

＊製作のスケールは自由ですが出来るだけ大きく高くつくりましょう。ケント紙を余らせてはいけません。
＊縮尺自由の人型をつくり、自分のつくった造形の上に置いてください。もし立体に内部を作る場合は、その中を覗けるようにしてください（疑似体験できるように）。
＊出来上がった塔は、より大きく見えるように下から見上げて自ら撮影してみましょう。できれば自然光のもとで。

作品制作風景

■大谷先生コメント

今年から百年記念館のホワイエ空間全体を使い、文字通りその床面で童心に帰って「ものつくり」をおこなった。この日の経験は皆さんにとって建築の原体験のひとつとなる。神戸大学の工学部建築学科に入学された皆さんは、これからまさに空間や建築に直に向き合える。この喜びをまず感じてほしい。

今年の課題を終えて、今後のためにいくつかの助言を申し上げたい。この課題は取り組む本人の自由な発想を前提としている。5 枚のケント紙が与えられたなら、それを余さず使い切るように工夫する、という直感がはたらかなければいけない。1週間前にお題を公表したのも、事前に策を立てる時間のためであった。できるだけ高く、というテーマを実現するに際しては、ケント紙の特性（硬さ、しなやかさ、どのくらいのアールなら曲げやすいか）、あるいは加工を減らして強度を保つ方法、楽して得する作戦などをよくよく考えて欲しかった。建築世界の裏には常に重力（1 G）との戦いがある。

一方、周りにいる同期約 80 人の製作中の動向を（横目に）観察することも大事。同じ方角に向けて走らない。みな同志でもありライバルでもある。いかにして集団の一群から抜け出るか（抜け駆けするか）、同じ時間と同じ材料を使いながら、どのような自分のオリジナリティを生み出すのかをいつも考えてほしい。競争と言うとなにか悪い響きを感じるかもしれない。だが、多くの人たちの中から選りすぐりのアイデアを引き出すために避けては通れないのが建築コンペである。実際敷地は一つしかないから、複数案を試しに建ててみることはできないのです。

全作品を展示しての大谷先生の講評

制作された作品（上）と光嶋先生の講評（下）